

# ハンナ・アーレントにおける暴力論について

小林 裕一郎

本稿では、ハンナ・アーレントの初期の著作である『全体主義の起原』における全体主義的な暴力の過程を整理する。

アーレントは、20世紀を代表する思想家である。彼女は全体主義の時代をヨーロッパで生きたユダヤ人であり、アメリカに亡命してからは全体主義についての考察をおこなっている。その成果が本稿で対象とする『全体主義の起原』である。今回は本書を分析するために、反ユダヤ主義、ナショナリズム、大衆という全体主義の3つの要素に着目し考察を進める。これら3つの要素は、相互に関連しながら全体主義を形成していく。

本稿では、こうした要素を中心に歴史的な形成過程をたどりながら、全体主義と反ユダヤ主義との関連を整理する。そして最終的にアーレントの全体主義的な暴力論を示すことを目指す。

キーワード：ハンナ・アーレント、暴力、反ユダヤ主義

## はじめに

本稿では、ハンナ・アーレント (Hannah Arendt) の初期の著作である『全体主義の起原』 *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft* を対象として、その中で展開される全体主義 (Totalitarismus) 的な暴力 (Gewalt) の過程を整理することを目的とする。

アーレントは、20世紀に活躍した思想家である。彼女は20世紀前半に、マルティン・ハイデガー (Martin Heidegger) や、カール・ヤスパーズ (Karl Jaspers) から直接に指導を受け<sup>1)</sup>、その思考方法を構築していった。しかしそれ以上に彼女の思考を規定したのは、理性と暴力の混在する時代背景だった。20世紀前半という、それまでで最も理性的であると考えられた時代は、まったく逆の現象を発生させた。その出来事は、合理性という観点からは理解しにくいものであり、多くのユダヤ系の知識人たちを驚愕させ、その理解不能な現象を把握するための枠組み形成へと向かわせた。

そうしたユダヤ系の知識人のひとりがアーレントだった。彼女は第二次世界大戦がまだ終わらないうちから、『全体主義の起原』の執筆を始めていた。そして戦後明らかになった強制収容所の実態などを踏まえて書き直し、1951年に出版している。本書が出版されると大きな話題となり、それまで無名だった彼女は一躍時の人となる。その後も『人間の条件』 *The Human Condition* や『イェルサレムのアイヒマン』 *Eichmann in Jerusalem* など、いくつかの著作を刊行し、1975年に彼女が亡くなってからも、それらは主に政治学の分野などで読まれ続けている。

社会学においても近年、『人間の条件』の重要性が再認識されている。それはユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas) の公共性論に影響を与えた著作としての認識である<sup>2)</sup>。

そうしたなかで、本稿が対象とする『全体主義の起原』は、社会学の分野から取り上げられることの少ない著作といえる<sup>3)</sup>。それには種々の理由があると思われる。1つあげるとすれば、本書では20世紀の全体主義という過去の現象が対象であり、現代にも活用可能な概念、例えば『人間の条件』における公共性概念のような枠組を、明確に示さないことが考えられる<sup>4)</sup>。本書が示すのは、現在から考えると非日常的な出来事であり、その長期的で羅列的な記述は、現在の社会を分析する場合の枠組としては用いにくい。

本稿はこうした現状を分析するための枠組構築を目指すものではない。本稿が目的とするのは、現在全体主義を理解しようとする試みにおいて、その先駆的な著作として自明化した本書を、長期的な暴力形成過程の理論として再解釈することである。

では『全体主義の起原』とはどういった内容の著作だったのか。20世紀の2つの全体主義的な暴力について<sup>5)</sup>、長期的な視点から記述した本書は、「反ユダヤ主義 (Antisemitismus)」、「帝国主義 (Imperialismus)」、「全体的支配 (Totale Herrschaft)」という3部構成からなる大著である。

本書はその表題からもわかるように、大きな意味での全体主義を取り扱った著作である。しかし実際には本書で全体主義そのものに言及する部分は以外と少ない。それはアーレントが全体主義の中にその起原があると考えず、全体主義にいたる過程の中にその要素を見つけようとしたからである。そのため本書の多くを構成するのは、そうした過程の要素についての説明である。

まず第1部では、反ユダヤ主義の歴史について、全体主義の要素となるべき事柄が述べられている。しかしアーレントは、ただ単に全体主義へといたる過程を、やみくもに追求したのではない。彼女は、反ユダヤ主義との関連におけるユダヤ人と非ユダヤ人との関係の変化を対象として限定するという方法で、その考察を行っている。次に第2部において、帝国主義について考察している。ここで着目されるのは、「膨脹のための膨脹」(Arendt [1951] 2008: 291=1972b: 7) という装置が定着する過程である。そして最後の第3部において全体主義を分析する。それはここまでの第1部、第2部の考察によって浮上した全体主義の要素が、全体主義へと結実していく過程である。

本書は以上の3部で、全体主義を説明しようとする。しかしアーレント自身が本書を3冊の別々の著作であるといっているように<sup>6)</sup>、それぞれ繋がりを持ちつつも、1部ごとの主題を軸にした著述がなされているようにみえる。

そうみえる理由として、伊藤洋典が指摘するように、本書が全体主義の起原を表題としながらも全体主義を歴史の観点から記述したのではなく、その要素に着目している点があげられる (伊藤 2004: 43-4)。それは本書が、長期的な歴史記述の書であっても、通時態としての全体主義論としてよりも、重点がその要素に置かれていたからだと考えられる。つまり1つの物語としての全体主義ではなく、20世紀の暴力を歴史的な要素から構成されたものとしてとらえようとするのが、アーレント全体主義論の1つの側面だといえる。

本稿においてもこの要素を枠組として考察する。ただし種々指摘される全ての要素を取り上げることは困難である。そのため今回は大きな要素に焦点をしばって考察する。取り上げるのは、ドイツが全体主義へといたる歴史的背景としての反ユダヤ主義、ナショナリズム、大衆 (Masse) という3つの要素である。これらは全体主義の要素として、どれも欠かすことのできないものとアーレントは考えた。ナショナリズムは帝国主義において全体主義の要素となり、大衆は帝国主義以後の

全体主義を担った。その間に第一次世界大戦がある。しかし本稿で特に注目するのは、そうした歴史的な流れの中で形成された反ユダヤ主義についてである。彼女は反ユダヤ主義を、「全体主義支配機構の兇悪きわるまる全装置を動員させた」、「国民社会主義イデオロギーの核心」(Arendt [1951] 2008: 29=1972a: 1) ととらえる。それは偶然出来上がったものでも、一部の人間による意図的な創作物でもなく、社会的な形成物である。

本稿でもこうした社会的形成物としての反ユダヤ主義に重点を置いて、アーレントの思考をできるだけ丁寧にたどりつつ、全体主義を導くイデオロギーとしての反ユダヤ主義を示したい。

本稿ではまず第1章で、反ユダヤ主義の形成過程を3つの視点にしばってみていく。この章でその性質を明確にした反ユダヤ主義は、全体主義についての考察の下地となる。そして第2章から第3章にかけて、帝国主義形成から全体主義形成、そしてその運動までの過程をナショナリズムと大衆という概念に焦点をあてて整理する。この2つの概念を明確にすることは、全体主義の輪郭を示すことでもある。そして最後に、全体主義におけるこれらの要素の関連性を明らかにする。ただし今回は、ナチズムとスターリニズムという2つの全体主義のうち、主にドイツを中心に発生したナチズムのみを考察の対象とする。

## 1 反ユダヤ主義という要素

本章では、反ユダヤ主義が形成される過程に注目する。

アーレントは本書において、反ユダヤ主義についての考察に多くの紙面を割いている。彼女の全体主義論にとって、反ユダヤ主義は欠かすことのできない現象である。しかしそれだけ重要視する反ユダヤ主義だが、全体主義との関係は、わかりにくい部分が多い。

本章においては、まず全体主義との関連性を問う前段階として、反ユダヤ主義を3つの視点で明確にする。それはヨーロッパにおける反ユダヤ主義の過程を、歴史的に整理することで行われる。

まず第1節で、反ユダヤ主義について常識化した2つの作業仮説について言及する。そして第2節から第4節までを使って、3つの視点からの反ユダヤ主義の形成過程を、歴史的な流れにそって整理していく。

### 1-1 反ユダヤ主義についての2つの〈誤解〉

反ユダヤ主義は、アーレントの全体主義論においてなくてはならない要素である。しかしそれだけ重要な反ユダヤ主義だが、歴史家が2つの〈誤解〉をしているとアーレントは指摘する。

まずアーレントは、「反ユダヤ主義を『説明』しようとするあらゆる試みは、事実そのものと比較して見ると、不完全な、あわただしくでっち上げられた作業仮説としか見えない」(Arendt [1951] 2008: 30=1972a: 2) として、常識化したと思われる2つの作業仮説を示す。

その1つが、反ユダヤ主義を外国人嫌いと同視する見解である。例えばナチスのプロパガンダ(Propaganda)がナショナリズムを増大させることによって、反ユダヤ主義も増幅されるというのが、その見解の実例だとアーレントはいう。つまり排他的な民族主義の増大が、それに属さないユダヤ人へと向けられるということである(Arendt [1951] 2008: 30=1972a: 2)。

しかしアーレントは、こうしたプロパガンダによるナショナリズムの増大を、歴史家が過大に評価しているという。そして実際にはナチスは、ナショナリズムをそれほど重要視せず、逆に軽蔑し

ていたというのである (Arendt [1951] 2008: 29-30=1972a: 2)。それは反ユダヤ主義の1つの形としてのナチスが、ナショナリズムによって反ユダヤ主義を煽動したという認識を否定する。つまり国民的な意識から生れる排他性は、ホロコーストを引き起こした反ユダヤ主義の特性ではないということである。

もう1つは、ユダヤ人がスケープゴートにむいていたというものである。アーレントはこのスケープゴート説を論理的に否定する。ユダヤ人がただスケープゴートにむいていたという偶然の理由なら、それはユダヤ人ではなく「自転車乗り」(Arendt [1951] 2008: 34=1972a: 6)でもいいわけであり、逆になぜユダヤ人がスケープゴートにむいていたかを説明するためには、歴史的な解説が必要になってくる。そうすると、ユダヤ人はただスケープゴートにむいていたということではなく、なんらかの理由があってその立場になったのだという解釈が成立するために、この仮説は成り立たないのである (Arendt [1951] 2008: 34=1972a: 6)。

以上の2つの誤解を念頭に置いて、以下では反ユダヤ主義の形成過程を3つの視点からみていく。

## 1-2 国家と反ユダヤ主義

まず最初の視点である、国家とユダヤ人との結びつきについて考察する。

アーレントによると、近代における「反ユダヤ主義の最初の徴候は、1807年の敗戦によってその構造が崩壊した古いプロイセン国家が、最後にはビスマルクによる帝国建設によって完成するドイツ人の国民国家に作り変えられた改革時代のプロイセンに見出される」(Arendt [1951] 2008: 86=1972a: 53) という。

こうした改革によって、「手痛い打撃」(Arendt [1951] 2008: 89=1972a: 56)を受けた階級が2つある。それは貴族階級 (Adel) と小市民階級 (Kleinbürgertum) であり、この2つの階級から反ユダヤ主義がとねえられたとアーレントは指摘する。

まず貴族階級についてみていくと、彼らはプロイセン政府の改革によって多くの特権を失う。貴族はこのことによってユダヤ人の特権が大きくなり、プロイセンがユダヤ人の国家になると懸念を表明する (Arendt [1951] 2008: 89=1972a: 56)。その根拠は、ユダヤ人が国家の財政援助者であるということによる。つまり貴族は、ユダヤ人が自分たちの特権を奪う改革政府に援助しているという思い込みから、ユダヤ人への敵意を持ったとアーレントはいう。そしてこうした特権を持つユダヤ人への警戒も同時に喚起するのである (Arendt [1951] 2008: 91=1972a: 58)。

次に小市民階級については、こちらもその経緯は貴族階級のそれと類似している。小市民階級は、それまで国家によって「閉鎖的な経済システム」を保護され、「経済的生活の変動から守られてきた」(Arendt [1951] 2008: 100=1972a: 66) が、資本主義経済が発達するにしたがって、これまでの国家の保護が外れ不安定な立場へと強制される。

こうした立場となった小市民階級は、それまでの援助を国家にではなく銀行に求めなくてはならなくなり、この階級からみたとき、何も生産しない銀行家は、搾取者、あるいは寄生者としてうつた (Arendt [1951] 2008: 101=1972a: 67)。そして小市民階級は、自分たちへの保護を打ち切った国家機構に加わっているようにみえるユダヤ人を憎悪したとアーレントは述べている (Arendt [1951] 2008: 102=1972a: 68)。このような現象は、反ユダヤ主義政党に「国家そのものを攻撃する可能性を与えた」という (Arendt [1951] 2008: 106-7=1972a: 72)。この政党にとっては、ユダヤ人はその真の対象ではなく、国家そのものが対象となる。つまり「反ユダヤ主義という道具」(Arendt [1951]

2008: 89=1972a: 56) を使って、国民国家 (Nationalstaat) を破壊しようとする動きである。

以上のようなユダヤ人と国家との関係は、実際には第一次世界大戦終結までには消滅する。しかし国家と裏で密接に関係するユダヤ人という認識は、後にプロパガンダによって増幅されることになる。

### 1-3 無機能な存在としてのユダヤ人

反ユダヤ主義形成の第2の視点は、無機能な存在としてのユダヤ人というものである。本節では、こうした無機能なイメージが形成される過程を明らかにする。

アーレントは反ユダヤ主義の理由として、アレクシス・ド・トクヴィル (Alexis de Tocqueville) が発見したフランス革命における貴族階級に対する民衆の憎悪がヒントになると指摘する (Arendt [1951] 2008: 31=1972a: 3)。それまで、権力と富を併せ持つ貴族階級は、民衆にとって支配的ではあっても、〈支配〉という社会形成の機能を持つ階級として認知されてきた。しかしフランス革命前の貴族は支配権を失い、「明確な機能をまったく持たない富」 (Arendt [1951] 2008: 32=1972a: 4) だけを持つ、社会的に無機能な存在として民衆は認知することになった。そしてこうした存在を堪えがたいものとして感じる。このような社会的に無機能な存在として浮かびあがるのがユダヤ人だとアーレントは考えた (Arendt [1951] 2008: 32=1972a: 4)。

以下では、ユダヤ人が社会的に無機能な存在として形成される過程について簡単に整理する。

まず、アーレントが国家におけるユダヤ人の役割について述べている部分からみていく。ユダヤ人は国家に金銭的援助をする集団としての役割を持ち、国家もそうしたユダヤ人を必要とした。国家との関係において他の諸階級と違い、宙に浮いた存在であるユダヤ人は、相互作用に縛られることなく国家に援助をしえた唯一の存在だった (Arendt [1951] 2008: 46=1972a: 17)。そこには国家とユダヤ人との相互利害関係が存在した。絶対君主制から国民国家への移行過程において国民全体を代表しようとする国家は、それまでのどの階級からも距離を置くと同時に、各階級に与えていた種々の特権を破棄した。そのため国家に対して財政的援助をする階級はなくなり、それを担う役割が必要になった。その財政を担当したのが、どの階級にも属さないユダヤ人だった (Arendt [1951] 2008: 46-7=1972a: 17-8)。この財政的援助の見返りとして、国家はユダヤ人に居住地の自由などの保護を行う (Arendt [1951] 2008: 48=1972a: 18)。こうして各地の宮廷へと散らばったユダヤ人は独自のネットワークを持ち、ユダヤ人同士の緩やかな連帯を維持した (Arendt [1951] 2008: 48-9=1972a: 19)。

しかし19世紀末から、他の資本家がこれまでユダヤ人が独占してきた財政的援助を担うようになる。すでに国家が必要とする財政援助の額は、ユダヤ人が援助できる額を大幅に超えてしまい、さらに国家援助の見返りの大きさに気づいた資本家たちが、こぞって国家に援助したために、ユダヤ人はその財政的な役割を大幅に減らしていく (Arendt [1951] 2008: 63-4=1972a: 32-3)。

ユダヤ人に残ったのは、ヨーロッパに広がる独自のネットワークだった。このネットワークによってユダヤ人は、「和平の仲介者」 (Arendt [1951] 2008: 71=1972a: 39) の役割を担う。しかし戦争の時代へと突入すると、その役割も失ってしまう。そして同時に国家は、「ユダヤ人を解放して他のすべての国民と平等」 (Arendt [1951] 2008: 74=1972a: 41) に扱うようになる。これはユダヤ人が特別な任務に必要ではなくなったことを意味し、特権を失ったユダヤ人は、無用な富を持つ社会的な機能を持たない存在として、認知されるようになるとアーレントは指摘する。

つまり、国民国家体制の中で社会的な意味を持っていたユダヤ人は、資本家の登場などにより徐々にその機能を失い、度重なる戦争により社会的に無機能な存在へとかわることによって、民衆の反感をかうことになったということだと考えられる。

#### 1-4 例外ユダヤ人と反ユダヤ主義

第3の視点は、例外ユダヤ人 (Ausnahmejuden) についてである。本節では反ユダヤ主義の徴候が、例外ユダヤ人という存在から生まれる過程を、歴史的な流れの中で整理していく。

非ユダヤ人社会に受け入れられる存在としての例外ユダヤ人は、ユダヤ人と非ユダヤ人との妥協のような形で認識された。ヨーロッパにおいて、政治的に平等というものが求められるようになると、非ユダヤ人からそれまで異世界の存在として認識されていたユダヤ人が、非ユダヤ人的同質性を持った集団に近づけられる。しかし非ユダヤ人にとって、歴史的に異質であり外部の人間であったユダヤ人が、これからは自分たちと同質であるという認識を持たざるを得なくなると、その異質性を直視することになる。これによって、ユダヤ人への敵視が反ユダヤ主義を喚起するという可能性を生む。しかし現実には、このことによって直接反ユダヤ主義は起こらなかった。それは平等化が、実際にはならなかったからだと考えられる (Arendt [1951] 2008: 140=1972a: 103)。

こうした平等化の波を非ユダヤ人は、ユダヤ人の中の一部を例外として受け入れることで乗り切ろうとする。この過程で例外として受け入れられたユダヤ人は、それまで非政治的な民族だったことから、政治的色合いのきわめて薄い存在として神聖化され、特別な人間であることを期待された。それは誰よりも教養があり、キリスト教徒よりもキリスト教的であるなどの過度の期待であり、例外的なユダヤ人というよりも、例外的な人間であることを求められた (Arendt [1951] 2008: 141-2=1972a: 105)。こうした要求全てにこたえることは不可能だが、例外ユダヤ人自身もその要求を理解していた。そして自分たちが非ユダヤ人社会で受け入れられているのは、このような条件を満たしているからであるということもわかっていた。そのため「解放のような政治的方法によってではなく」、教養によって「自分の民族の抑圧された身分から逃れようと」 (Arendt [1951] 2008: 152=1972a: 115) したのである。こうした例外ユダヤ人は、革命から歳月を経て政治から離れ、倦怠を常に感じているフランスを中心とする19世紀の市民社会において、魅力的な存在として社交界に受け入れられた (Arendt [1951] 2008: 168-9=1972a: 130-1)。

アーレントは、そのような「例外ユダヤ人の歴史の象徴となる資格を他の誰よりも持っている人物」 (Arendt [1951] 2008: 169=1972a: 131) として、ベンジャミン・ディズレイリ (Benjamin Disraeli) を取り上げている。

イギリスのユダヤ人であるディズレイリは、偏見の対象であるユダヤ人であることを逆に利用して、政治的活動をした例外ユダヤ人である。彼は非ユダヤ人社会に強く同化した例外ユダヤ人であったために、政治に関与することのない他のユダヤ人とは違い、利用できる力を信じ政治に参画した唯一のユダヤ人だった。彼が信じ尊重したのは、彼自身に流れるユダヤ人の「血 (Blut)」の力である (Arendt [1951] 2008: 181-2=1972a: 143)。この思いは、例外ユダヤ人たちがその事業維持のために形成した国際的な組織を、ユダヤ人の血の力によるものとして意識することにより強まった。こうした血の力への傾倒は、彼の選民意識を強化し、世界制覇の野心をいだかせたとアーレントはいう (Arendt [1951] 2008: 182-3=1972a: 143-4)。

しかしディズレイリの選民意識は、非ユダヤ人も共有することになる。ディズレイリが血という

ものを強調すればするほど、非ユダヤ人にとっても血という意識が浸透し、そこから反ユダヤ主義のイデオロギーへ転化するとアーレントは考えた。

本章では、以上のような3つの視点から反ユダヤ主義を整理した。それは国家との結びつきによって発生したユダヤ人への反感が、その結びつきを失うことによって同様の反感を生み出し、さらにそうした状態からの脱却を求めた逆説的な血への傾倒が、さらなる全体主義の要素を形成するという負の連鎖の過程である。そしてその要素となるのが、ナショナリズムである。次章ではこのナショナリズムの変遷を、帝国主義時代という背景との結びつきによって整理していく。

## 2 ナショナリズムという要素

アーレントによると全体主義とは、首尾一貫したプロパガンダを用いて大衆を組織化する「大衆運動であり、それは今日までに現代の大衆が見出し自分たちにふさわしいと考えた唯一の組織形態」(Arendt [1951] 2008: 663=1974: 6)である。それはテロル (Terror) によって、組織を維持し続けるという運動でもある。

このような全体主義において、ナショナリズムが重要性を持つ。そしてそのナショナリズムに重要性を持たせたのが帝国主義だった。

本章ではまず第1節で、この帝国主義の性質について、2つの帝国主義という視点から、その構造と機能を整理する。そして第2節で、それらの帝国主義を導く存在としてのナショナリズム、特にここでは種族的ナショナリズム (völkische Nationalismus) と呼ばれる概念に注目する。最後に第3節で、帝国主義と全体主義との橋渡しの一翼を担った膨脹という装置についてみていく。

### 2-1 2つの帝国主義

ではまず、帝国主義とは何なのかについて考察する。

アーレントは帝国主義が、「国民国家体制と経済や工業の発展との不調和によって惹き起された」(Arendt [1951] 2008: 275=1972b: iii) と指摘する。

まず「工業生産の不断の成長」(Arendt [1951] 2008: 291=1972b: 7) によって資本が過剰に増大し、一国の国境内ではその過剰資本を有効に消化することができなくなる。そして19世紀頃には、それを「存続させるためには、経済に必要な膨脹を、国民国家の対外政策の基本」(Arendt [1951] 2008: 290-1=1972b: 7) にさせるほかないと考えるようになった市民階級が、徐々に政治化していく(Arendt [1951] 2008: 290-1=1972b: 7)。しかしその基盤となる国民国家の性質は、そうした帝国主義とは反する。国民国家は「領土、民族、国家を歴史的に共有する」ことを原理とする「同質の住民」(Arendt [1951] 2008: 289=1972b: 6) が主役となる。帝国主義的政策によって他国に進出し、他民族を制圧しても、歴史的な共有物のない他民族を統合することは、同化と同意を強制することになる(Arendt [1951] 2008: 289-90=1972b: 6)。それは国民国家の本来の理念から大きくそれてしまい、国家機構自体の崩壊を招くおそれがでてくるため、帝国主義的な膨脹と国民国家の共存は難しいといえる(Arendt [1951] 2008: 289-90=1972b: 6)。もともと帝国主義は、「資本家という1つの小さな階級」が、「彼らの富が自国の社会構成の枠に収まり切れなくなり」、「彼らが過剰資本の有利な投資先を求め」(Arendt [1951] 2008: 303=1972b: 16) たためにおこったとアーレントはいう(Arendt [1951] 2008: 302-3=1972b: 16)。当時国民は階級別に分裂していたが、それを繋ぎとめる役割として

も帝国主義は考えられた。膨脹という共通の方向性を持って進むことで、共同の帰属意識を持つことになり (Arendt [1951] 2008: 339=1972b: 47-8)、「富みすぎた」資本家と「貧しすぎる」モップ (Mob) との同盟を成立させる (Arendt [1951] 2008: 343-4=1972b: 51)。しかし、こうした同盟の形態が問題となる (川崎 2005: 62-3)。

当初こうした輸出は経済分野だけであったが、資本家は国家による保護を求めていく (Arendt [1951] 2008: 337-8=1972b: 46)。こうした流れの中で、過剰資本とモップの同盟は国外へ輸出される。問題はこの同盟を国内にも持ち込むかどうかだった。イギリスはこれを海外にしほり、他のヨーロッパ諸国は本国にもその同盟を適用する。それはイギリスが、植民地政策と本国の政治を原則として区別し、ドイツやオーストリアなどでは両者に区別をつけなかったという違いである。そのことが後に、帝国主義時代が終わって植民地政策を本国政治から切り離すことができたかどうかの違いになったのだと考えられる (Arendt [1951] 2008: 347=1972b: 54)。

アーレントは、こうした2つの帝国主義を「海外帝国主義 (überseeischen Imperialismus)」と「大陸帝国主義 (kontinentale Imperialismus)」として把握する。つまりイギリスやフランスなどの海外に植民地を求めた西欧的な帝国主義を海外帝国主義とし、国民国家の成立が遅れ植民地獲得競争にも遅れをとったドイツやロシアのような、すでに植民地化されてしまった海外にはなく、ヨーロッパ内部にその植民地を求めることになった帝国主義を大陸帝国主義とした (川崎 2005: 94)。

こうした植民地を海外に求めた海外帝国主義の国々と、大陸内に求めた大陸帝国主義とでは、その後の展開に違いがでる。海外帝国主義諸国は非ヨーロッパ諸外国を次々に併合することに成功したが、大陸帝国主義諸国は本国と隣接した大陸内に植民地を得ることを求め失敗している (Arendt [1951] 2008: 472=1972b: 161)。このような大陸帝国主義は、ただヨーロッパにのみ植民地の可能性があったから推進されたというだけでなく、ナショナリズムの問題が関わっている<sup>7)</sup>。

## 2-2 種族的ナショナリズム

イギリスやフランスなどの民族と国境の一致する国々とは違い、ドイツやロシアはそれらが一致せず、民族と国境を統一しようという動きがでてくる。こうした動きは、ナショナリズムによって導かれる。このようなナショナリズムを、「種族的ナショナリズム」という。種族的ナショナリズムは、民族と国境が一致しないドイツやロシアなどを、汎ゲルマン主義や汎スラヴ主義のような汎民族運動 (Panbewegungen) へと導き、ヨーロッパ内部に点在する同一の民族を含めた国家の形成に向け拡張していく。こうした動きが大陸帝国主義だと認識されている (川原 2004)。

では大陸帝国主義を導く、種族的ナショナリズムはなぜ起こったのか。種族的ナショナリズムは、「明かに自分たちより大きな幸運と成功に恵まれた西欧の国々」 (Arendt [1951] 2008: 483=1972b: 171) に対しての劣等感から生まれたもので、「中欧および東欧のすべての国と民族の国民的感情を決定的に規定し形成するもの」 (Arendt [1951] 2008: 481=1972b: 168) であるとアーレントは考えた。

そうした種族的ナショナリズムは、現実的な国境を範囲として設定する西欧型のナショナリズムに対して、「『血』という虚構の基準」 (Arendt [1951] 2008: 482=1972b: 170) にその同一性を求める。アーレントはその性質を、「最初から現実には存在しない架空の観念を拠りどころとし、それを過去の事実によって立証する試みさえ全く」 (Arendt [1951] 2008: 482=1972b: 170) しない、非現実的な存在として規定している。

アーレントは、こうした二分法によってナショナリズムを分析し、帝国主義を整理する<sup>8)</sup>。



## 2-3 「膨脹のための膨脹」という装置

こうした帝国主義的な拡大の根底にあるのは「膨脹のための膨脹」という装置である（Arendt [1951] 2008: 291=1972b: 7）。アーレントはこの装置を「この時代の新しい原理」であり「すべてを動かす原動力」だと考える（Arendt [1951] 2008: 286=1972b: 3）。

すでにみてきたように、ヨーロッパにおいて過剰資本が一国家の国境という障壁を破壊することによって膨脹は始まった（Arendt [1951] 2008: 303=1972b: 16）。当初の目的である過剰資本の輸出は、その保護のための権力をも輸出する。つまり「輸出された資本が指定した道を国家の政治的権力手段が従う」（Arendt [1951] 2008: 308=1972b: 22）という事態である。こうした事態は、その構造を維持するための膨脹を要求し続ける。膨脹は「膨脹それ自体のための不断のプロセスとして押し進められる」（Arendt [1951] 2008: 313=1972b: 26）のである。そうしたプロセスによって維持され続けるのは、「国民を帝国主義化し、外国領土の破壊的征服と異民族の絶滅的圧制のための道具に国民を再組織する」（Arendt [1951] 2008: 347=1972b: 54）ための運動でもあった。

ドイツなどの大陸帝国主義の国々は、このような構造を国内の政治から切り離すことができなかつたために、国内でもこうした思考を定着させることになる。アーレントはこの構造を、全体主義の「最初のおそろべき企て」（Arendt [1951] 2008: 347=1972b: 54）であると考えているのである。

以上のように帝国主義は、19世紀の「アフリカ争奪戦」を経て、第一次世界大戦へといたる。それは「全ヨーロッパの荒廃」や「伝統の崩壊」、「生存の危機」を招くこととなる（Arendt [1951] 2008: 302-3=1972b: 16）。このような「帝国主義的膨脹の後継者」（Arendt [1951] 2008: 315=1972b: 27）として全体主義が成立していくのである。

次章では、全体主義が形成され運動へと組織化されていく過程を整理する。その過程で必要になるのが大衆という存在である。

## 3 大衆という要素

大衆は、全体主義運動（totalitäre Bewegung）を維持し推進し続ける原動力だとアーレントはいう。こうした大衆は、第一次世界大戦により階級が崩壊することによって社会内部での連帯を失った存在として登場する。

本章では、前章でみてきた帝国主義が第一次世界大戦によって崩壊した後の、社会構造に着目する。そしてその社会構造によって出現した大衆が、本章のキー概念である。まず第1節で、第一次世界大戦後に力を持った大衆の性質と全体主義との関わりについて言及し、第2節で、全体主義を形成する大衆が、さらにその運動へと吸収されていく過程を整理する。そして最後の第3節で、大衆が反ユダヤ主義を受容する過程について、これまでの整理を下敷きにしながらか考察する。

### 3-1 全体主義と大衆

本節では、全体主義における大衆についてみていく。

まず、全体主義運動を担った主要な要素が、大衆だとアーレントはいう。この大衆という概念はよく使われるものだが、アーレントにとっての大衆とはどんな存在だったのか。

アーレントは大衆を「政党、利益団体、地域の自治組織、労働組合、職業団体などに自らを構成することをしない人々の集団であればどんな集団にも当てはまる」（Arendt [1951] 2008: 668=1974:

10)と定義する。そうした「共通の利害」や目的によって結ばれないのが大衆の特徴でもある(Arendt [1951] 2008: 667-8=1974: 10)。そのような特徴から、大衆は政治的に無関心だと考えられ中立的だと思われていた(Arendt [1951] 2008: 668=1974: 10)。こうした大衆は、第一次世界大戦以降人々を繋ぎとめていた階級が壊れてしまい、社会の中での連帯を失ってしまうことによって多く生まれることになった。大衆は「目に見える世界の現実を信」じず、「勝手にこしらえ上げた統一的体系の首尾一貫性」にのみ動かされるとアーレントはいう(Arendt [1951] 2008: 745=1974: 80)。その逆である「現実の一要素をなす偶然性」(Arendt [1951] 2008: 745=1974: 80)を大衆は信用せず、首尾一貫性のために「肉体の死すら甘受」(Arendt [1951] 2008: 747=1974: 82)してしまう。つまり偶然性を帯びる現実よりも、荒唐無稽であっても首尾一貫性を持つものに、大衆はひかれていく。大衆がこうした姿勢を強固に維持するのは、「全般的崩壊の混沌の中にあって」は「最低限の自尊と人間としての尊厳を保証」するのが、こうした首尾一貫性であると思うからである(Arendt [1951] 2008: 747=1974: 82)。

社会からの連帯を失い、社会内部での機能をも失ったと思っている大衆にとって、自尊心を守るために求めたのが、そうしたぶれることのない虚構の世界だったと考えられる。そしてこうした大衆の求める世界をプロパガンダで描いたのがナチスだった。ナチスは「ユダヤ人の世界陰謀の作り話」(Arendt [1951] 2008: 749=1974: 84)をプロパガンダにして、虚構の世界を広めることに成功する。彼らは執拗にこのプロパガンダを繰り返す事によって自らの一貫性を確認させ、大衆をひきこんでいく。

### 3-2 全体主義運動と大衆

このように首尾一貫した虚構の世界によって大衆を取り込んだプロパガンダは、しかしまだその目的を達成したわけではない。つまり「全体主義プロパガンダが目的を達するのは、人々を説得したときではなく組織したとき」(Arendt [1951] 2008: 762=1974: 95)だとアーレントは考える。

プロパガンダは大衆を取り込む技術であり、それを組織化する技術でもある。しかしこうして大衆の組織化がなったとき、その組織化を助けた嘘は「全体主義的な現実の中心的要素」(Arendt [1951] 2008: 764=1974: 97)となり、もはやそれを取り除くときには、その組織自体の存続が危うくなる。こうして達せられたプロパガンダによって全体主義の中心的要素となった嘘は、全体主義自体の行動原理を支配することになる(Arendt [1951] 2008: 763-4=1974: 97)。そしてその「政治的行為の表現様式そのもの」(Arendt [1951] 2008: 711=1974: 49)として、全体主義プロパガンダの実証としての恐怖を感じさせる暴力が繰り返される。その暴力のもとでは、全体主義運動に大きな役割を果たした大衆もその対象となる。

全体主義のテロルは、「独自の鉄の籠を持ち出し、籠を「締め上げ」て「自由な空間」を消滅させ、「すべてが融合して巨大な大きさの一つの存在になったかのような空間をつくる」(Arendt [1951] 2008: 958=1974: 280)。このようなテロルが支配した全体主義においては、もはやその本質となってしまった暴力は行動原理を示せない(Arendt [1951] 2008: 960=1974: 283)。

全体主義の行動を規定したのは、「自然もしくは歴史の過程が要求する」(Arendt [1951] 2008: 961=1974: 284)のものであるとアーレントはいう。こうした自然や歴史によって「執行者」と「犠牲者」の役割が要求され、役割の決まった人間はそれを運命として受け入れることになる(Arendt [1951] 2008: 961=1974: 284)。それがもし犠牲者の役割であったとしても、全体主義運動に自己を一

体化させている大衆には運動の維持が優先される (Arendt [1951] 2008: 662-3=1974: 6)。なぜなら、組織化された全体主義的な大衆組織が、「没我性」と「自分の幸福への無関心」という特徴を持ち、その運動の維持を第一の目的であると感じ、そのためには「自己保存」より運動の維持を優先させるからである (Arendt [1951] 2008: 660-1=1974: 4)。それは大衆が、自分たちが正しくあるのは、その運動とともにあるときのみだと思っているからだとアーレントはいう (Arendt [1951] 2008: 661=1974: 5)。一度その運動に取り込まれてしまうと、大衆はその運動から逃れることができなくなる。そのため、その役割がなにであっても運命として受け入れざるを得ない。

そしてこの運命を準備するのが、歴史的に構成された人種主義のようなイデオロギーだとアーレントはいうのである (Arendt [1951] 2008: 961-2=1974: 284)。

### 3-3 大衆の反ユダヤ意識

ではなぜ、その対象がユダヤ人だったのか。

アーレントによると、全体主義維持のためのテロルは、社会の中での無機能的な存在へと向けられる。こうした社会的に無機能的な存在として認知されるのが、すでにみたようにユダヤ人だった (Arendt [1951] 2008: 32=1972a: 4)。

国民国家の中でユダヤ人が持っていた国家の銀行家としての役割は、他の資本家の国家への投資の重要性の認知と参入により、その機能を大きく減らした。そして第一次世界大戦によってその機能を失う。こうした「権力なき富と政治的意志なき尊大さ」を、大衆は「寄生的なもの、余計なもの、挑発的なもの」として感じ、ユダヤ人への憎しみを深かめた (Arendt [1951] 2008: 33=1972a: 5)。そして大衆が求める一貫した虚構の世界にとって、ユダヤ人は必要がない存在として認知される。さらにそれまで国家との相互依存的な関係にあったユダヤ人は、国家への不満も背負うことになる。

このような憎悪をイデオロギーとして利用し、ナチスは大衆を取り込むことに成功する。こうしたプロパガンダが効果をあげるのは、ユダヤ人の選民性を大衆が認識していたからだと考えられる。現実味のないイデオロギー、つまり反ユダヤ主義は、首尾一貫性を示すための暴力によって大衆をひきつけ全体主義へと組織化する。そして、こうして形成された全体主義運動の標的となったのが、ユダヤ人だったと考えられる。

## むすびにかえて

### — 全体主義的な暴力論の再構成 —

本稿は『全体主義の起原』を、反ユダヤ主義、ナショナリズム、大衆という3つの要素から解釈し、全体主義的な暴力論として再構成する試みである。特に今回は、反ユダヤ主義が与える他の要素への影響の考察を軸にして、アーレントの暴力論を整理した。

まず軸となる反ユダヤ主義であるが、1つのユダヤ人観が1つの反ユダヤ感情になるのではなく、いくつもの歴史的な過程の中で定着したイメージが1つの反ユダヤ主義を構築することに注目した。今回はその中で、3つの過程に焦点をあてて整理している。

最初に、ユダヤ人が国家と同一視される過程があげられる。ユダヤ人は国家に対して銀行家の役割を果たしていたが、その役割のために、国家からの保護を解消された階級からの恨みを買う。次に、国家への援助者がユダヤ人ではなくなり役割を喪失すると、無機能的な存在として認知されるこ

とにより嫌悪される。最後に、その嫌悪のもとになったユダヤ人という血を、ユダヤ人自身が道具として強調することによって、逆に反ユダヤ主義の枠組をイメージさせてしまう。

そこからは、ユダヤ人への負のイメージが連鎖的に派生する仕組みが読み取れる。当初国家に対する怒りがユダヤ人を巻き込んでいたのが、国家から離れたユダヤ人へと移動し、背負い込んだ負のイメージを逆に利用しようとするユダヤ人の試みが、そのイメージを決定的にするのである。

ただ、こうした反ユダヤ主義は、それだけでは全体主義を導くことはない。全体主義を導くための土台となるのは、ナショナリズムと大衆という要素だと思われる。この2つの要素は、全体主義を構成する大きな役割を担い、これらなしには全体主義は構成できない。

しかし、このようにつくられた土台も、またそれだけでは全体主義を形成、維持するのは不可能である。なぜなら全体主義には、荒唐無稽な首尾一貫した指針が必要だからである。当人たちにとっては現実的なナショナリズムはこの役割を果たせない。ナショナリズムが成し遂げるのは、全体主義の土台となる膨脹のための膨脹という資質を定着させ、全体主義の下地となることである。そしてナショナリズムは消滅することでもう1つの役割を果たす。大衆の興味をひかなくなったナショナリズムのかわりに信奉されるのが、プロパガンダによる首尾一貫したイデオロギーである。そして、そのイデオロギーこそが反ユダヤ主義だと考えられる。

このようにみえてくると、3つの要素は相互に依存しあい、その関係の中から全体主義的な暴力が見出されることがわかる。それはアーレントの目指した全体主義理解の一端であると思われる。つまり、長期的なヨーロッパの歴史の中で、いくつかの要素の相互依存が生み出す暴力への過程が、アーレントの暴力論といえるのではないかと考えられるのである。

## 【注】

- 1) 川崎が指摘するように、ハイデガーとヤスパースの影響は「アーレントの思想を終生規定」（川崎2005：19）したと考えられる。
- 2) 橋本摂子（2006）、鈴木玉緒（1992）など。
- 3) 社会学のみならず他の分野においても考えられる『全体主義の起原』への言及の変化は、東西冷戦と関係する。本書が全体主義としてナチズムだけではなく、スターリニズムもその対象としてあげているだけに、右派と位置づけられる人々からの参照と、左派といわれる人々からの批判の対象として冷戦期には言及されることが多かった。しかし冷戦終結後、例えば日本においては、人間論として左派からの評価を受けていると、仲正昌樹は指摘している（仲正2009：30）。
- 4) ただし後の著作に現われる概念の素地は、本書に多く含まれていると思われる。
- 5) 対象としてアーレントが取り上げるのは、ナチズムとスターリニズムである。彼女はこの2つの現象を全体主義として認知する。
- 6) マーガレット・カノヴァン（Margaret Canovan）は、3部の間の繋がりについて、アーレントの証言から、統一した理解の難しさを指摘している（Canovan 1992=2004：29-30）。
- 7) 本稿では、帝国主義の解釈について、川崎（2005）の視点を参照して整理を行っている。

8) しかしこの二分法によるナショナリズムの把握は、アーレントが最初に行ったものではない。すでに第二次世界大戦中に、ハンス・コーン (Hans Kohn) によって、東のナショナリズムと西のナショナリズムとして分類されていた。アーレントは、これを参考にしてナショナリズムの考察を行ったと思われる(塩川2008: 189)。これらは後のナショナリズム研究家たちによって、多少の修正を加えられながら継承されている。それは多くの類似した対概念を生み出したが、最も参照されるのは、東のナショナリズムに対応する〈エスニック・ナショナリズム〉と、西のナショナリズムに対応する〈シヴィック・ナショナリズム〉である。この2つのナショナリズムについて黒宮一太は、「エスニック・ナショナリズムが、『血の同質性』などを基準にして国民とそうでない者とを仕分けする偏狭で排他的な性格を帯びているのに対して、シビック・ナショナリズムの方は、個人の意志を尊重し誰であれ希望すれば当該国家の国民として包摂されるという、よりリベラルな性格を有した共同帰属意識と考えられた」(黒宮2009: 320)という性質の分類を行っている。それらはアーレントの2つのナショナリズムとも対応する。アーレントの西欧型のナショナリズムは、シヴィック・ナショナリズムに対応し、種族的ナショナリズムは、エスニック・ナショナリズムに対応すると思われる。こうした種族的ナショナリズムは、非現実的であり、そのため大衆をひきつけることになる。

## 【参考文献】

- Arendt, Hannah, [1951] 2008, *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft: Antisemitismus, Imperialismus, Totalitarismus*, München: Piper. (=1972a, 大久保和郎訳『全体主義の起源1: 反ユダヤ主義』みすず書房; 1972b, 大島通義・大島かおり訳『全体主義の起源2: 帝国主義』みすず書房; 1974, 大久保和郎・大島かおり訳『全体主義の起源3: 全体主義』みすず書房.)
- , 1958, *The Human Condition*, Chicago: University of Chicago Press. (=1994, 志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫.)
- , 1965, *Eichmann in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil*, New York: Viking. (=1969, 大久保和郎訳『イェルサレムのアイヒマン: 悪の陳腐さについての報告』みすず書房.)
- Bruehl, Young, 2006, *Why Arendt Matters*, New Haven: Yale University Press. (=2008, 矢野久美子訳『なぜアーレントが重要なのか』みすず書房.)
- Canovan, Margaret, 1992, *Hannah Arendt: A Reinterpretation of Her Political Thought*, New York: Cambridge University Press. (=2004, 寺島俊徳・伊藤洋典訳『アレント政治思想の再解釈』未来社.)
- 千葉 眞, 1986, 「全体主義現象の理解に向けて: アーレントの全体主義理論」『社会科学ジャーナル』国際基督教大学社会科学研究所, 24(2): 65-89.
- 石田雅樹, 1998, 「ハンナ・アーレントと〈ユートピア的なるもの〉: その全体主義論におけるニヒリズムとユートピアニズム」『筑波法政』筑波大学社会科学系, 24: 235-53.
- 橋本摂子, 2006, 「公共性とコミュニケーション: アーレントとハバーマスにおける言論の政治」『年報社会学論集』関東社会学会, 19: 1-12.
- 星野 智, 2005a, 「アレントの帝国主義論」『情況』第3期6(1): 162-9.
- , 2005b, 「アレントの全体主義論」『情況』第3期6(6): 166-73.
- 伊藤洋典, 2004, 「『全体主義の起原』を読む」『情況』第3期5(9): 42-51.
- 川原 彰, 2004, 「ハンナ・アーレントと全体主義の時代経験 (一): 〈公的なものの光〉を求めて」『法學新報』中央大学法学会, 111 (3・4): 95-140.

- , 2005, 「ハンナ・アーレントと全体主義の時代経験 (二・完) : 〈公的なものの光〉を求めて」『法學新報』中央大学法学会, 111 (11・12) : 1-51.
- 川崎 修, 2003, 「帝国主義と全体主義: ハンナ・アーレント、ローザ・ルクセンブルク、ホブスン」『思想』945: 8-26.
- , 2005, 『アレント: 公共性の復権』講談社.
- 木前利秋, 2008, 『メタ構想力: ヴィーコ・マルクス・アーレント』未来社.
- 黒宮一太, 2009, 「シビック／エスニック・ナショナリズム」大澤真幸・姜尚中編『ナショナリズム論・入門』有斐閣アルマ, 317-37.
- 森分大輔, 2005, 「国民国家とナショナリズム: ハンナ・アーレントのナショナリズム論」『社会科学ジャーナル』国際基督教大学社会科学研究所, 54COE 特別号: 139-62.
- 仲正昌樹, 2009, 『今こそアレントを読み直す』講談社現代新書.
- 大澤真幸編, 2002, 『ナショナリズム論の名著50』平凡社.
- 太田哲男, 2001, 『ハンナ＝アレント』清水書院.
- 岡野八代, 2004, 「ハンナ・アーレント『全体主義の起原』」『現代思想』32(11): 166-9.
- 塩川伸明, 2008, 『民族とネイション: ナショナリズムという難問』岩波新書.
- 鈴木玉緒, 1992, 「公共圏とコミュニケーション的行為: アレントとハーバマス」『社会分析』社会分析学会, 20: 59-75.

# Die Theorie der Gewalt von Hannah Arendt

Yuuichirou KOBAYASHI

Diese Studie ist über die Theorie der Gewalt von Hannah Arendt. Unter Theorie der Gewalt versteht jeder etwas anderes. Aber ich erforsche diese Theorie als die Theorie des Totalitarismus.

Arendt ist eine repräsentative Denkerin des 20. Jahrhunderts. Berühmt ist sie durch ihr Werk „Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft“. Dadurch gilt sie als Begründer der Theorie des Totalitarismus. Sie war als eine Jude in Deutschland geboren. Die erste Hälfte dieses Jahrhunderts war ein gewalttätiges Jahrhundert. Sie sah sich mit Schwierigkeiten konfrontiert, weil die totalitäre Gewalt damals die Welt herrschte.

Es gab totalitäre Systeme von altes her, so untersuchte sie geschichtliche Ursprünge und Elemente.

Die Problematik des Totalitarismus ist wichtig. Aber es ist auch heute schwer zu lösen. Sie ist in vieler Hinsicht nicht ganz gelöst. Der Totalitarismus ist gegen Zivilisation und widermenschlich. Die zukünftige Menschheit hängt von dieser Lösung ab.

Einen rein ideologischen Totalitarismus gibt es nicht. Er erscheint in Zusammenhang mit anderen. Ich erforsche diesmal Hannah Arendt nach den Totalitarismus in Zusammenhang mit Nationalismus, Massensteuer, Antisemitismus. Besonders möchte ich die Beziehungen zwischen dem Totalitarismus und Antisemitismus klarmachen.

**Stichwörter: Hannah Arendt, Gewalt, Antisemitismus**